

SRID NEWSLETTER

No.303 FEBRUARY 2001 国際開発研究者協会 創設者大来佐武郎
〒102-0074 東京都千代田区九段南 1-6-17 千代田会館 5 階 FASID 内

経済協力のパラダイムシフト

国際協力銀行 荒川博人

米国の企業幹部向け研修セミナーで使われる教材の中に、1コマ漫画がある。恐竜集団が大きな会議場で大会を開いており、壇上ではリーダーが迫りくる哺乳類の脅威について演説している図である。これを見てなかなか笑えない。自分の仕事である経済協力ももしかすると経済・社会の新しい環境変化に適応していないのではという懸念が湧く。

まず、本質的な変化は途上国においてもマーケットエコノミーの浸透と深化である。これはインターネットの普及による情報コスト、取り引き費用の劇的な低減や情報公開の進展により加速されている。また、WTOへの加盟、企業会計原則、会社法、外為関連法や倒産法などの法的フレームワークなどがこの数年で劇的に整備され、途上国での企業行動のプラットフォームが出来つつある。また、途上国の資本市場も整備されつつある。ルールオブザゲームなどが確立し、民間企業がリスクをアセス、ミテイグメント出来る余地が広がり、従来公共事業で行っていた領域にリスクをとる企業が進出している(勿論、国によって整備度はことなるが)。

ともすると、円借款の供与が、途上国の公的な実施機関を過度に温存し、民間企業のインフラへの投資意欲を削いでいるのではないかとの見方も出てきている。

第2に、途上国への資本の移転を見ると、民間の金融・直接投資がODAなどの公的部門の6倍から10倍に達しており、金額の面では既にODAはマイナープレイヤーとなっている(20年前はおおむね同額)。ちなみに、中国は昨年7月にソヴリンのボンドを野村証券を主幹事として東京市場で発行した。利率は1.72%、期間は5年。一方、ODAである対中国円借款の標準金利条件は1.8%である(期間30年で)。たんに表面利率だけをみると、既に円借款は有利であるということはない。

第3に、地球温暖化などの地球規模で対応すべき問題がかなり危機的な状態となってきている。企業の利潤追求型行動と全地球的な問題の相克がある。この問題は政治的な強いコミットメントとともに、個々の人々の意識改革やCO₂などの外部不経済について価格メカニズムを通じて解決するのが筋であろうが、それを待っているだけでは事態はとりかえしのつかない点に来てしまうであろう。経済協力の役割が根源的に重要になってきた。

第4に情報技術（IT）の革命であろう。円借款では、途上国の小企業への融資を行うため、先ず現地の金融機関に融資し当該金融機関から小企業に融資するというタイプの方式がある。通常当該金融機関にコンサルタントを配置するが、このコンサルタントの仕事の一つが、小企業へのマーケティングのアドバイスである。一方、昨今のインターネットで小企業もホームページを開くことにより、コンサルタントの狭いアドバイスよりも、幅広くかつ安価なマーケティングが達成することも可能となった（現実には単にホームページだけでは充分ではないが）。即ち伝統的な開発に対するアプローチもITによって簡単にその制約を解き放たれようとしている。

短い紙面で幾つかの最近起こっている点について触れた。これ以外にも経済協力のプレーヤーが多様化している点（NGOの役割増大）、3年前の東アジア型のような金融のグローバル化と一体化に伴う経済危機については本質的な予防について解決の方策をまだ見出してはいない点。さらに日本をみると早晩I/Sバランスがくずれ、援助の資金が厳しくなってくることなど経済協力は大きな転換点を迎えている。

上記のような本質的な変化への対応については、未だちょうど良い回答がでておらず、試行錯誤の段階で、大きな構想からは遠い。経済協力としては、おそらく現場感覚に裏付けられた強力な知的蓄積と活用がかぎとなろう。組織としては限られたリソースをどこにどのように振り向けるのか、またいろいろな知恵を活用するため、外部とのアライアンスを求めることとなり、よりオープンな組織とならざるを得ないであろう。そしてコアコンピタンスを十分に生かした付加価値を追求することは必須となる。なんか、ビジネススクールの教科書に出てくる解答のような感じだが、新しい環境への適応ということではどの業界も同じであろう。それが出来ない場合、恐竜の運命と同じであろう。

貧しいニジェール

(株) 東京設計事務所 水上 博雅

たまたまニジェール国ニアメ市にあります。ニジェールは国土の三分の二が砂漠で、一人当たりGNPが190ドルと世界一二を争う最貧国です。ウラン鉱山と農業以外見るべき産業はありません。国民の90%が農業に依存しています。雨さえ降ってくれば遊牧民も農耕民も幸せで平和なのでしょうが、数年の間隔で旱魃があり、これが政治的動揺をもたらして来ました。成人識字率は14%で衛生観念もなく、衛生施設も極端に不足していて、マラリアや流行性脳脊髄膜炎その他の感染症で毎年数万オーダーの人が死にます。首都の中心部にも家禽類、山羊、牛、駱駝などいたるところに居り、空地や路傍が動物と人間のトイレになっています。統計上の乳児死亡率は12%近く、平均寿命は42歳です。最も近い海港はベニンのコトヌで、千キロ離れている上、エアフランスも週一便しか来ない僻地です。フランス植民地時代にもこの遠さから、チャドと同じく開発が殆どなされませんでした。60年代末にウラン鉱が開発さ

れ、ウランが輸出の7割を占めた時期にこのニアメ市にも高層ビルが建ちました。80年代に入ってウランの需要と価格も下がり、ブーム時の政策の失敗の付けが回ってきて経済は縮小を続けています。現在の一人当り所得は1960年の独立時よりも少なそうです。ということは数百年前とあまり変わっていないという事です。税収の殆どが公務員の給料と大学生の奨学金に消え、役所は紙代や燃料代にも事欠くありさまです。これらインテリ層は首都ニアメに集中しており、政府を通じて無学な国民を支配しています。最大の援助国フランスもこの国に対してはかなり距離を置いているようで近隣諸国に比して人の配置も手薄です。貧しさの見本のようなこの国に去年から間隔を置いて数ヵ月滞在する予定です。昔の栃木県の片田舎の貧しさも身体に染付いているはずですが、この圧倒的な貧しさの圧力になすすべもないといった所です。

私の中での国際開発（入会の挨拶）

地域振興整備公団 守家 隆志

私が国際開発、国際協力に対して関心を抱くようになったのは、ある程度一生を通じて自分が学んでいきたいことがうっすらと見えてきたような時期、ちょうど今の学生部の方々ぐらいの時でした。

大学時代を通じて、土木工学といういわゆるハード面からの開発学を学び、大学院では都市計画というアーバンデザイン的な学問を学んできました。そういうこともあってか、学生時代から「まち」を見ることやそこに住む「ひと」と触れ合うことが好きで、アルバイトをしては旅行に出かけていました。

その旅行先の中心は東南アジア諸国でした。それにはやはり欧米諸国をはじめとする先進国にはない「成長途上の未知数の活力」「雑踏の中での生活の息吹き」、そんなものを感じ取ることができるからだったと思い返します。エアチケットと一日十数ドルの資金を握りしめ、バック片手にまちや村を渡り歩く、そんな旅が好きなのです。そういった旅を通して、自分の旅の視点と重ね合わせながら考えてみると、触れ合った「ひと」から感じることで、タイの無国籍の山岳民族、フィリピンのスモーカーマウンテンに住む人々、ネパールのストリートチルドレン…そういう様子を見ると自然と自分には何かできないのか、そんな感覚にさいなまれます。お金を渡すことは簡単、しかしそれではいけない。じゃ何ができるのか。なんてことを自問自答しながらの道中しばしばです。

また、自分の目で見てきた「まち」から、発展の段階に応じた「まち」としての開発問題は尽きないことを感じました。初期段階としては、インフラ整備の不足による不衛生さが特に感じられます。道路交通に関してはいうまでもなく、ひとたびスコールのような雨が降ると下水管から鼻を突くような臭いの強烈な汚水が吹き上げる、こんな光景をよく見受けました。また、これは東南アジアではないのですが、ちょうど一昨年の夏にトルコを訪れたときに大地震にあうという貴重な体験をいたしました。その時のイスタンブール周辺のいわゆる新興住宅街の被害の悲惨さ、そこからはご存

知の通り違法建築の問題が浮き彫りとなりました。都市計画の端くれに携わっている自分として衝撃を受けた覚えがあります。

今は国際開発とはかけ離れた Domestic な仕事に携わっていますが、国際協力ではなく国内地域協力を心がけて働いています。まだまだ国内でも住環境、就業環境の未整備、中心市街地の疲弊、大規模跡地問題等々、都市構造、産業構造の再編の必要性が生じています。ここ日本においてもレベルの違いこそあれ段階的な開発問題は常に生じていると考えます。また、私個人としても精進に励み、将来的には何らかのかたちで国際開発に貢献したいと思っております。

S R I D 新年会

21世紀初のS R I D新年会は1月19日午後6時半から如水会館にて開かれた。正月らしいピリッとした冷気の中を、コートの襟を立てながら会場に集まった。参加者は正会員17名、学生会員11名。学生会員の参加率が高いせい、そして女学生が多いせい、大変家族的で華やいだ会合になった。カキのムニエル、おでん、とりの空揚げなどの料理は、如水会館特製の隠し味がよく効いて美味であった。

代表幹事の神田さんによって楽しい司会がされ、浅沼会長から年頭のあいさつをいただいた。「S R I Dは、戦後の進歩主義の中で育った旧世代と、現在のいわゆるポスト・モダニズムの新世代との二つの大きなグループからなっていると思う。その両世代が交流し議論をする中で、開発問題においても新しいコンセプトが生まれると思う。S R I Dの将来について、今年の総会で皆で徹底的に議論して、S R I Dは今後もサロンとして楽しい会合として行こうと決めた。大いに飲んで、食べて、しゃべる、その中で、国際開発のあり方を一緒に考える、そんな集まりとして今年も愉快地やってゆきませんか。」

その後、S R I D旧世代と新世代の交互の近況報告があり、あっという間に午後9時のお開きの時間になった。

出席者名(敬称略)： 浅沼 信爾、小倉 正城、神田 道男、木内 嶮、小林 一、
倉又 孝、小森 剛、難波 寛昌、後藤 一美、高橋 一生、
辻岡 政男、沼田 道正、保科 秀明、三木 常靖、守屋 隆志、
山田 喜代信
学生部 11名

(文責：辻岡)

学生部の代表として

慶応義塾大学経済学部 林 遼太郎

子供の頃から時々流れてくる第三世界の映像が、頭からなぜか離れない。子供心には、高度経済成長の恩恵にあずかった幸運な世代であったなどとはつゆ知らず、ただただ自分の育った生活環境と異国の情景の格差に漠然とした疑問を感じていた。このような世界が現実に本当に存在するのか、と。

全代表の佐伯さんのようにカンボジアへの旅行を通して強い使命感にかられ、この世界へ足を踏み入れようと思ったわけでもない。ただ、本当にマス・メディアを通して流れてくる情報が実際に起こっているのかいないのか、自分の目で確かめてみたい。その思いが他人よりわずかばかり強かったせいだろうか。しかしもしかしたらそれは故郷の長野の自然に勝る自然を、東京の喧騒のなかで知らず知らずのうちに第三国に求めているだけなのかもしれない。今でも開発になぜ関心が引き寄せられるかという理由は判然としないが、今でもこのしこりはとれず、

ともかく上京してきて、開発関連の団体を探していた末、偶然 SRID と出会い、夏休みを境に通いだしました。それ以後、本会の方々との交流はもちろん、学生間での活動を通じて毎回新たな発見をさせていただいている。そしてこの度学生部の代表をつとめさせていただくことになりました。現在のところ会員の中で最年少ということで一抔の不安もありますが、なんとか SRID の活動に寄与していきたいと考えております。その際には学生部の方々をはじめ、本会の方々のお力も借りることがあるかと思いますが、その際にはご協力お願いいたします。

以下、今年学生部でやりたいと思っていることの概要を示します。特に昨年とは大きく異なる点が二点あります。まずさまざまな機構を通して開発を眺めるという点。具体的には NGO、企業、政府、国際機関を取り上げます。そして話題をさらに絞りこむため、現在注目を集めている緊急援助、環境などのサブタイトルを作り、普段の主な活動である勉強会に月単位での一貫性をもたせていきたいと考えています。

第二の特色として、各トピックスの総括の意味をこめ、講演会を行いたいと考えております。SRID の最大の特色としては開発に関するさまざまな機関におつとめされている方々が一同に会して、サロンとしての話し合いを行っているという点にあると思います。そこでこの特色を今年は積極的に活用し、少しでも多くの方々の関心を開発に集めていただくようにしていきたいと思っております。そのため本会に所属していらっしゃる方々に講演を依頼させていただくことがあるかと思いますが、その際にはご協力の方、お願いいたします。ちなみに四月は近年のコソヴォ紛争や最近のインド西部での大地震のことなどから NGO の緊急援助について着目したいと考えております。そこでの講師を現在は外務省総合外交政策局軍備管理軍縮課長でいらっしゃる岡村善文氏に依頼しようとして連絡をとりあっておりますので、その際には是非本会の方もお参加ください。

以上の二点が主な特徴です。その他にも学生部の主体的な活動として国際協力フェ

スティバルへの参加や合宿の企画、また今回は **SRID** 学生部からは私だけとなりますが、インドのマドゥライ地方で、農村の開発に関するスタディーツアーに2月9日から10日間ほど参加してきます。

また過去の **NEWS LETTER** を読み返してみると、小森氏の若手による国際協力活動の推進、三上氏からの学生部に対する要望など **SRID** 学生部に関する内容がしばしば散見されることに気づきます。そこでこれらの議論を深め、現在の若手、学生部にはどのようなことが期待されているのか、どのような能力が必要とされているのかなどの意見が **ML** などを通して交わしていただくと幸いです。

最後になりましたが代表者として精一杯努めていく所存ですので、以後学生部の活動ともども、よろしく願いいたします。

お知らせ

1. 退会会員 鈴木綾さん、柳川 純二さん、和田 巖さん
休会会員 橋本幸憲さん、吉田 恒昭さん
2. 国際開発ジャーナル2月号に **SRID** 有志として
「It 革命と途上国—開発協力のニューフロンティアになるか—」という記事が掲載されました。 (23 ページ)